菜香亭と
フランス洋食器ピリヴィ

常磐大学総合政策学部特任教授
筑波大学名誉教授
齊　藤　泰　嘉

◆経　歴◆
昭和55年：東京都美術館学芸員
平成29年：筑波大学名誉教授
令和２年：常磐大学特任教授

1. はじめに

山口市にある私の実家は、鹿鳴館外交で知られる井上馨が命名した「菜香亭（さいこうてい）」という料亭です。その3代目主人が私の祖父、齊藤泰一（たいいち）（1873－1970年）です。祖父は若い頃、井上馨の書生をしていました。

私は、祖父が明治時代に購入し、菜香亭で使用していたフランス製洋食器「ピリヴィ（あるいは「ピリヴィッツ」）」の美しさに魅せられ、その価値について調べています。

■山口市菜香亭（筆者撮影）

2. 井上馨と山口市菜香亭

幕末、井上馨は、伊藤博文を含む長州藩の５人で英国に留学し、西洋文明の偉容を目の当たりにしました。一行は、長州藩が英仏米蘭４か国連合艦隊に対して攘夷を実行したこと（下関戦争）をロンドンで知ります。井上馨と伊藤博文の２人は、その無謀さを藩主毛利敬親に説くため、急遽日本に帰国します。なお、元治元年（1864）の下関戦争では、泰一の叔父にあたる齊藤千熊幸郷（ちぐまゆきさと）が、奇兵隊諸隊に加わって命を落としています。

菜香亭は、その後の明治時代に誕生します。泰一の父であり萩で藩の膳部職（ぜんぶしき）をしていた齊藤幸兵衛は、毛利敬親に従って山口へ移り、明治10年（1877）頃に料亭を開きました。井上馨は、この料亭を「菜香亭」と命名します。

菜香亭では、伊藤博文や西郷隆盛の弟西郷従道、鞍馬天狗のモデルと言われる剣豪渡辺昇など、多くの政治家や軍人、文人らがもてなされました。

山口の迎賓館ともいわれた菜香亭でしたが、平成８年（1996）に閉店し、約120年続いた老舗の歴史も終わりを告げます。しかし、閉店を惜しむ市民の声が保存運動へとつながり、解体移築後、平成16年（2004）に市民交流施設「山口市菜香亭」として生まれ変わりました。

3. ３代目主人泰一とピリヴィ

泰一は、萩中学校卒業後、東京で井上馨の書生として過ごします。その頃、井上馨の妻、武子の体が弱く、泰一が代わりに料理を作っていました。その料理の腕が井上馨に認められ、上野精養軒で西洋料理の修業をすることになります。その後、泰一は山口に戻り、菜香亭２代目主人である兄、甲兵衛の跡を継ぎ、３代目主人「幸兵衛」として、上野で習得した文明開化の味、西洋料理を出し始めます。明治29年（1896）には、井上馨の還暦祝賀会が菜香亭で開かれています。

その翌年の明治30年（1897）、泰一は山口県庁の洋食奨励策に従い、洋食器を購入します。菜香亭で使用していた洋食器は、ピリヴィ社製の他、オランダのペトルス・レグー社製のものがあります。これらの洋食器のうち現存するものは、ピリヴィ社製が19件60点、ペトルス・レグー社製が１件11点の計20件71点です。

ペトルス・レグー社製は阿蘭陀焼の皿のみであり、寸法が異なるものの同じ文様の皿が、神戸市

立博物館に収蔵されています。一方、ピリヴィ社製は皿41点の他、白地に赤紫の植物文様を散らした華やかな大型スープチュリーン（蓋付深鉢、高さ29.0㎝、口径23.7㎝、底径15.9㎝）、コーヒーポット、シュガーボウル（蓋付砂糖鉢）、エッグカップ（ゆで卵入れ）、グレーヴィボート（ソース入れ）など多彩です。

ピリヴィ社は1818年創業で、パリの南約200㎞に位置するフランス中央部の古都ブールジュ近郊のムアン＝シュル＝イエーヴルにあります。1844年、2代目のシャルル・ピリヴィが家業を受け継いで以降、万国博覧会で受賞を重ねました。

19世紀のピリヴィのデザインは、フランスらしい華麗な文様の皿や壷もありますが、泰一が購入したピリヴィは、白地に金の帯や縁取りを基調とした幾何学的なデザインで、各界の名士をもてなすにふさわしい古典的品格を有しています。

■菜香亭保有のピリヴィ（筆者撮影）

それらの食器を裏返すと、器底に商標があり、そこにシャルル・ピリヴィの名前と1867年及び1878年のパリ万博で金牌を受賞したことが記されています。また、明治30年（1897）に洋食器を購入したことが、泰一の自筆覚書に記されていることから、菜香亭保有のピリヴィの製造年は、おそらく明治11年（1878）から明治30年（1897）の間にあると考えています。

4. 東京、横浜、ソウルのピリヴィ

平成12年（2000）に宮内庁三の丸尚蔵館で開催された企画展「御即位10年記念特別展　第6回展　饗宴－近代のテーブル・アート」の図録によれば、宮中で使われた《菊花文カップ、ソーサー、フランス（ピリヴィ社）、20世紀初頭》が出品されています。「ソーサー高台内側銘」にはシャルル・ピリヴィの名と1900年のパリ万博で最高賞を受賞したことが記されています。

令和２年（2020）に横浜市歴史博物館で開催された企画展「横浜市新市庁舎完成記念『明治・大正ハマの街－新市庁舎建設地・洲干島（しゅうかんじま）遺跡－』」では、遺跡から発掘された《ピリヴィ社製の洋食器》（コーヒーポット、チュリーン、皿などの破片）や英国ジョンソンブラザーズ社製皿の破片などが展示されました。その中で、コーヒーポットやチュリーンの破片には、菜香亭保有のピリヴィと同じデザインのものが含まれていましたが、金色だけでなく青色の縁取りが施された食器もある点が菜香亭のピリヴィとの違いでした。「裏印」には前述の宮内庁の企画展で出品されたピリヴィと同じく、シャルル・ピリヴィの名と1900年のパリ万博で最高賞を受賞したことが記されています。これらの破片は横浜の銀行業界の社交場であった「横浜銀行集会所」の地階部分から出土しています。

また、2020年にソウル国立古宮博物館で開催された、朝鮮王朝宮廷で西洋各国の賓客をもてなす際に使用されたセーヴルやリモージュなどの仏英独の食器を紹介する企画展でも、李花紋入りのピリヴィのチュリーン、皿、コーヒーポット、ティーポットなどが展示されました。展覧会の図録を見ると、その中には菜香亭のピリヴィと同一デザインと思われるものがいくつもあり、やはり、商標には、シャルル・ピリヴィの名と1900年のパリ万博で最高賞を受賞したことが記されています。

■菜香亭保有のピリヴィの商標（筆者撮影）

5. おわりに

上記4. で紹介した各ピリヴィの製造年代はいずれも1900年以降であり、菜香亭保有のピリヴィは、僅かながらもこれよりも古いということになります。

今後は、ピリヴィを総合的に調査し、東アジアの近代化を物語る歴史資料としての価値、さらに時代を超える美術品としての価値を明らかにしていきたいと考えています。

■このコーナーは、つくば市が２００８年度から推進している「つくば市ＯＢ人材活動支援事業」に登録されている研究者・教育者の方々より寄稿を受けて作成しています。現役を一旦引退されてもいつまでも社会発展の牽引力となってご活躍をされている方々の研究実績や業務経験の一端をご紹介させていただくものです。